

“さえ”の語用論的考察

坂 原 茂

§1. 序 論

“さえ”（フランス語 *même*, 英語 *even*）という語は、ある種の興味深い意味特性を持つため、多くの言語学者の関心をひいてきた¹⁾。例えば、下の(1)と(2)を比較した場合、“さえ”によって修飾されている(1)は、(2)の意味に加えて、(3)のような過剰の意味を持っている。

- (1) 山田さえその試験に合格した。
- (2) 山田はその試験に合格した。
- (3) a. 山田は、他の人達より、その試験に合格する可能性が低かった。
b. 他の人達も、その試験に合格した。

“さえ”の導入する過剰な意味は、この語の修飾する要素が変化するのに応じて、変化する。例えば、(4)は、(1)と同様(2)を含意するが、(4)の過剰な意味は、(3)でなく、(5)である。

- (4) 山田はその試験にさえ合格した。
- (5) a. 山田がその試験に合格する可能性は、他の試験に合格する可能性より低かった。
b. 山田は、他の試験にも合格した。

60年代の言語学の全体的活性化に伴う、研究領域の拡大により、60年代後半から、それまで主として哲学者の関心事にすぎなかった前提 (*presupposition*) の問題が、言語学内部でも活発に論じられるようになると、“さえ”が導入する過剰な意味は、概して、前提と関連して説明されることが多くなった。この場合、(3 a), (5 a)は、段階の前提 (*scalar presupposition*)、(3 b), (5 b)は、存在の前提 (*existential presupposition*) と呼ばれる²⁾。

この2つの前提は大まかに定式化すると、以下のようになる。ある文Pにおいて、*さえ*

により修飾される要素を a_0 と置き、その全体を $P(a_0 \text{ さえ})$ と書こう。Pにおいて、 a_0 と交換可能な要素 a_1, a_2, \dots, a_n の集合を E とおく。また、 $\text{Prob}(P(x))$ は、 $P(x)$ の確率を表わすとする。すると、 $P(a_0 \text{ さえ})$ の前提は、次の式で表現できる。

(6) a. 段階の前提

$$(\exists a_i) (a_i \in E \wedge \text{Prob}(P(a_0)) < \text{Prob}(P(a_i)))$$

b. 存在の前提

$$(\exists a_i) (a_i \in E \wedge P(a_i))$$

これは、議論を容易にするための便宜的な定式化にすぎず、真剣に考える必要はない。

〈 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ と限定表現〉

筆者は、既に、別の関連において、 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ の問題を論じたことがある (Sakahara (1982) 参照)。それは、限定表現を伴う文は、単に否定辞を付加するだけでは、元の文の自然な否定とは感じられず、否定辞に加えて、さらに、 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ を付けた方が、自然な否定として受け取りやすいという問題である。この場合、 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ は限定表現の導入する会話の含意 (conversational implicature, ある種の言外の意味) を、否定文においても、一定に保つ機能を持つと分析できる。

例えば、限定表現としてを例にとると、(7)を単純に(8)のように否定すると不自然な感じがする。

(7) 島本は、中田派議員としては正直だ。

(8) 島本は、中田派議員としては正直でない。

限定表現は、ある種の語用論的関連によって結ばれている対象の集合を二分し、その片方について、何らかの性質を断定する。このとき、もう片方については何も言われていないにもかかわらず、多くの場合、それらについては、問題の性質は成り立たないという推論がうながし、それが言外の意味となることが多い。(7)に関して、中田派議員と関連付けられる対象は、非中田派議員である。したがって、言外の意味とは、(9)のようなものである。

(9) 島本は、非中田派議員としては、正直でない。

次に、(7)と(9)がともに成立する条件を考えると、正直さの尺度において、島本の正直さの度合は、中田派議員の(平均的)正直さの度合を越えているが、非中田派議員の(平均的)

正直さの度合を下回っているということになる。とすると、以下のような図が得られる。

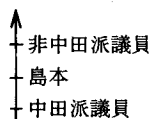


図1. (7)の暗示する正直さの尺度

ところが、(8)から得られる正直さの尺度は、下の図のようになり、中田派議員と非中田派議員の位置が入れ換わってしまう。

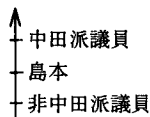


図2. (8)の暗示する正直さの尺度

すなわち、(8)のように、単に(7)に否定辞を付けただけでは、(7)の持つ言外の意味が変化してしまうため、(8)を(7)の自然な否定と解釈しにくくなるのである。

これは、限定表現が、通常の否定辞のスコープに入りにくいからである。(8)においても、この文の自然な解釈では、限定表現(“中田派議員としては”)は、否定文(“島本は正直でない”)の限定表現であり、限定表現を持つ肯定文(すなわち、(7))の否定ではない。(8)のような文では、限定表現が、否定辞のスコープ内にあるかどうかあまり明白ではない。この文に対応する、(9)のようなフランス語の文についても事情は同様である。

(9) Pierre n'est pas honnête pour un giscardien.

ところが、(9)の限定表現を前置して(10)を作っても、解釈は変わらない。

(10) Pour un giscardien, Pierre n'est pas honnête.

したがって、(9)においても、限定表現は否定辞のスコープの外にあると結論できる。限定表現を持つ文に対して、否定辞を付加するだけの単純な否定が作りづらいのは、結局、限定表現が、否定辞のスコープの中に入りにくいからである。

それでは、限定表現を含む文の自然な否定を作るにはどうしたら良いのか。これは最初に述べたように、否定辞に加えて、限定表現に^さえ_えを付加して、(11)のようにすれば良い。

(7) 島本は、中田派議員としては正直だ。

(11) 島本は、中田派議員として^さえ_え正直でない。

(11)においても、“中田派議員としてさえ”は、否定辞のスコープ内にはない。これは、(11)に対応するフランス語の文(12)と、限定表現を前置した(13)の意味の同一性により、間接的に推測できる。

(12) Pierre n'est pas honnête même pour un giscardien.

(13) Même pour un giscardien, Pierre n'est pas honnête.

ところが、(11)は、[・]さえがあるために、中田派議員の正直さの度合は、非中田派議員の正直さの度合より低いという評価を暗示する。これは、(7)が持つ言外の意味と同じである。この言外の意味の同一性のため、(11)は(7)の自然な否定と解釈されるのである。

これに対して、限定表現を含まない(14)は、たとえ、(15)のような会話の含意に持つにしろ、100円が、小さな金額であるかどうかなどという言外の意味は持たない。したがって、(14)は、(16)のように単に否定辞を付ければ、自然な否定文を得ることができる。このときには、[・]さえを付けると、出発点となる(14)にはない余計な意味を持ち込むことになり、かえって不適切である。

(14) 私は、100円持っている。

(15) 私は、100円より多くは持っていない。

(16) 私は、100円持っていない。

(17) 私は、100円さえ持っていない。

尺度を導入する限定表現には、さまざまなものがあり、例えば、(18)では、場所の副詞句が限定表現となっている。

(18) 私のラバさん、南洋じゃ美人。

このときも、(18)の否定としては、(19)より、(20)の方が自然に感じられる。

(19) 私のラバさん、南洋じゃ美人でない。

(20) 私のラバさん、南洋でさえ美人でない。

限定表現の中でも、特に興味深いのは条件文である。自然言語の条件文“PならばQ”の否定(のひとつ)は、譲歩文“PであってもQでない”により表わすことができる(詳細は、Sakahara (1982), 坂原 (1985) 参照)。この2つの文は、PとQの関連について同じ

評価を持つ。すなわち、 q を成立させる条件として、 p は $\sim p$ より好都合な条件であるという言外の意味である。これは下の図により表わされる。



図3. “ p ならば q ”と“ $\sim p$ ならば q ”の相対的実現可能性の尺度

したがって、“ p であっても q でない”は、優利な条件が与えられたにもかかわらず、 q が成立しないことを意味するから、多少とも期待を裏ざられたときの驚ろきを伴い、おおよそ、“通常の状態では、 p は q の十分条件であるが、何らかの特殊事情により、 p は q の十分条件になり損なった”という意味合いを持つ。

限定表現を含む文と、その否定を考察することで、 \dot{s} えは、肯定文において限定表現が導入する語用論的尺度を、否定文においても一定に保つ機能を持つことが明らかになった。これは、恐らく、この節の最初で触れた、 \dot{s} えが導入する段階の前提と関連付けて説明すべきであろう。この論文では、限定表現と \dot{s} えの関連は、上述の素描にとどめ、 \dot{s} えが非限定的表現を修飾する場合について考える。以下、§2では、これまでに、 \dot{s} えについてなされた代表的分析を概観し、検討を行う。§3では、特に、この語の段階の前提についての考察を行なう。§4では、この語の使用に課せられる制約について考えるとともに、その語用論的性格により、 \dot{s} えの段階の前提に対する自動的決定手続きは存在しないことを示す。

§2. 歴史的概観

〈付加変形と存在の前提〉

歴史的に見た場合、 \dot{s} えが一躍脚光を浴びるようになったのは、生成文法内部のある特殊な論争に関してであった。その論争とは、文の意味解釈は、深層構造を考慮するだけで十分であるか、それとも、深層構造に加えて、表層構造に含まれる情報も考慮に入れるべきであるか、というものであった。別の言い方では、変形が意味を変えるかどうかということである。この論争は、最終的には、生成意味論と解釈意味論の対決という形で、華々しく演じられることになるが、この論争が活発化する以前に、Kuroda (1965) は、付加変形 (Attachment Transformation) という変形操作を提唱し、後の解釈意味論を予想させる分析を行なっている。

黒田が、この変形を考えた主な理由は、 $even$ をひとつしか持たない(1)、(2)は許容されるのに対して、 $even$ を2つ持つ(3)は許容されないというものであった。

- (1) The flood even destroyed his farm.
- (2) The flood destroyed even his farm.
- (3) *The flood even destroyed even his farm.

ところが、書き換え規則が、下の(4), (5)のように、自由に even を導入することができるなら、その両方が even を導入してしまう(3)のような文を排除することは非常に困難になる。

- (4) VP → (even) V NP
- (5) NP → (even) D N

これを避けるには、even は、S を展開する(6)だけが導入できるとすれば良い。

- (6) S → (even) NP VP

そして、even が文頭以外の位置にも表われるという事実は、even を文頭から表層構造の位置に移動させる付加変形という操作を考えることで説明される。

しかしながら、(1)と(2)では解釈が異なる。より正確には、(1)は(2)と同じ解釈を持つが、それ以外の解釈も持っており、この解釈のもとでは、(1)と(2)は意味が異なるということになる。したがって、付加変形を認めるなら、一文に対して、even は多くとも1個しか存在しないという事実は容易に説明されるが、変形が意味を変えろという結論を認めねばならなくなる。当時の生成文法では、深層構造は意味解釈に必要なすべての情報を含むとされていたため、この黒田の提案は、大きな関心を集めた。

その後、付加変形は、2つの理由で理論的興味の対象外となった。その最初のものは、この変形を正当化する言語事実そのものが疑わしいことが明らかになったということである。すなわち、多少不自然ではあるが、even を2つ以上持つ文も許容されるということである。もうひとつの理由は、生成文法が、いずれにしろ、意味解釈の中心を表層構造の方に移してしまったため、もはや、表層構造が意味解釈にも関与するというのは当然のこととなり、付加変形による正当化を必要としなくなったからである。

この論文との関連においては、付加変形そのものよりも、黒田の指摘する(7)と(8)の間の言い換え可能性の方が興味深い。

- (7) Even John bought books.
- (8) a. N_1 bought books, N_2 bought books, $\dots N_{n-1}$ bought books and (even John)_{NP} bought books.

b. $(N_1, N_2, \dots, N_{n-1} \text{ and even John})_{NP}$ bought books.

(8 a)は、すでに付加変形の結果であり、(8 b)は、(8 a)から、等位構造縮約(conjunction reduction)の操作によって得られる。これは、(7)が持つ存在の前提(=John以外の人で、本を買った人がいる)の説明へとつながる。

〈Fillmore と非実現の期待〉

生成文法が1960年代になり意味の問題に取り組み始めると、意味論は、ある文が分析的に真であるとか、矛盾しているかなどの事実や、2つの文の間の含意関係を説明できなければならないと主張された。この背景のもとで、Fillmore (1965)は、黒田とほぼ同じ頃、(9)は(10 a)、(10 b)を含意すると分析した。

(9) She even reads Sanskrit.

(10) a. She reads Sanskrit.

b. One would expect that she does not read Sanskrit.

(10 b)は、このままでは、evenが導入する段階の前提と考えることはできないが、その先駆的ものと見なすことができる。

黒田とFillmoreの分析により、*さえ*についての観察材料は、一応整ったと考えることができる。次になすべきことは、この大まかな分析を踏まえうえて、言語事実についてより精密な観察を行ない、*さえ*の過剰な意味の理論的位置付けをするということである。

〈焦点、スコープ、段階の前提〉

Fillmoreの分析は、大筋においては積極的に評価すべきものを含んでいるが、以下に述べる3点において不十分であり、改善の余地を残している。

その最初のもは、*さえ*の焦点に関するものである。彼の分析では、*さえ*が文中の異なる要素を修飾するすべての場合に、同一の非実現の期待を含意するだけにとどまり、それらの文の違いは無視される。例えば、次の(11 a)、(11 b)は、ともに非実現の期待(12)を含意する。

(11) a. 彼女はサンスクリット*さえ*読める。

b. 彼女*さえ*サンスクリットが読める。

(12) 彼女はサンスクリットが読めないと思われている。

ところが、(11 a)と(11 b)の間には、これだけでは済まない差があり、これは考慮に入れる必要がある。したがって、これについては、黒田の方法に沿った、何らかの補填がなされなければならない。Fillmore 以後の分析ではすべて、*さえ*の焦点を考慮に入れており、この弱点は克服されていると言える。

第2のものは、*さえ*のスコープに関するものである。すなわち、*さえ*が[s…[s…x*さえ*…]]のような複文構造の補文内部に現われたときに、*さえ*のスコープは補文に限定されるか、それとも補文境界を越えて文全体にまたがるか、という問題である。言語形式Pにおいて、*さえ*の焦点をxとして、その全体を、P(x*さえ*)と書こう。これを、さらにQという主文に埋め込んだ場合に得られる文をQ(P(x*さえ*))と書く。このとき、主文Qが、補文の含意関係を素通りさせるような論理的性質を持つ場合には(タイプ1の述語)、以下で説明するように、スコープを明示的に考慮するかどうかは、比較的どうでも良いことである。少なくとも、大きな差異となつては表われない。ところが、Qが補文の含意関係を逆転させるような論理的性質を持つときには(タイプ2の述語)、スコープを明示的に考慮するかどうかで、大きな差が現われる。

第1のタイプの例として、Q=It is easy to believe that…を考えてみよう。これが実際に、第1のタイプの述語であることは、(13)、(14)を比較することでわかる。

(13) John and Mary will come. ⊃ John will come. (=If John and Mary will come, then John will come.)

(14) It is easy to believe that John and Mary will come. ⊃ It is easy to believe that John will come. (=If it is easy to believe that John and Mary will come, then it is easy to believe that John will come.)

次に、(15)を考える。

(15) It is easy to believe that even John will come.

非実現の期待は、evenのスコープが文全体であるときには、(16)となり、evenのスコープが補文に限定されるなら、(17)となる。

(16) One would expect that it is not easy to believe that John will come.

(17) One would expect that John will not come.

(16)と(17)を比較してみればわかるように、この2つの文の間の差異は微々たるものにすぎな

い。というのも、John が来ると信じるのが容易でないというのは、結局、John が来ないと信じているからで、(17)は、(16)の理由となっている。また、主文がこのタイプの述語のときは、ある解釈を与えられても、スコープを決定する手がかりにならず、恐らく、スコープを決定することはできないのではないかと思う。したがって、この場合には、やや恣意的に、even は、常に狭い方のスコープを取るとも、逆に、常に広い方のスコープを取るとも便宜的に決めておくことが考えられる。勿論、この決定は、理論的には何の根拠もない。

次に、補文の含意関係を逆転させる述語の例として、Q=It is difficult to believe that …を考えよう。この述語が、第2のタイプに属するものであることは、先の(13)と(18)を比較することでわかる。

- (18) It is difficult to believe that John will come. ⊃ It is difficult to believe that John and Mary will come. (=If it is difficult to believe that John will come, then it is difficult to believe that John and Mary will come.)

(18)は、John が来ることが信じ難ければ、John と Mary の両方が来るというのは、さらに信じ難いということを表す。ここで、even を補文に持つ、(19)を考えよう。

- (19) It is difficult to believe that even John will come.

(19)は、even のスコープが補文に限定されるときには、“John まで来るとは信じ難い”という意味になり、even のスコープが文全体であれば、“John でさえ、来るとは信じ難い”という意味になる。その各々の場合に、非実現の期待は、次のようになる。

- (20) One would expect that John will not come.
 (21) One would expect that it is not difficult to believe that John will come.

(20)は、勿論、(17)と同一であり、また、(16)と大差がない。(21)は、やや解釈に骨が折れるが、not と difficult を2重否定にならって取り去ると、おおよそのところでは、One would expect that John will come という期待で、ほぼ、(20)に対する矛盾命題となっている。したがって、主文がタイプ2の述語のときには、スコープを考えないと、全く違った期待を含意することになりかねない。後に述べるように、Karttunen & Peters (1979) は、even のスコープを明示的に考慮に入れる。しかし、彼らは、even のスコープの違いにより、解釈に差の出る(19)のようなタイプ2の述語についてしか考えておらず、そもそも意味の上からスコープの決定ができないタイプ1の述語については、全然触れておらず、恐らく、こ

うした事実があることに気付いているように思われたい。幸運なことに、この場合は、正にスコープを考慮することが余り意味をなさない場合なのである。

先に導入した $Q(P(x \text{ さえ}))$ という表記は、スコープを表示することができないという欠点がある。したがって、 $(Mx)P(x)$ という表記を導入しよう。これは、 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ (*même, even*) のスコープが P であることを意味する。また、 $Q(P(x \text{ さえ}))$ も従来通り用いる。 Q がタイプ2の述語であるとき、 Q と $P(x \text{ さえ})$ の意味関連により、可能な読みの片方が抑圧されることがある。例えば、次の(22), (23)を見よう。

(22) 私には東がどんな小さな騒音でさえ眼をさますとは信じられない。

(23) 私には東がどんな大きな騒音でさえ眼をさますとは信じられない。

(22), (23)の普通の読みは、順に、 $Q((Mx)(P(x)))$ と $(Mx)(Q(P(x)))$ である(実際、(22)から補文“東はどんな小さな騒音でさえ眼をさます”だけを取り出しても読みは変わらない。一方、(23)の補文“東はどんな大きな騒音でさえ眼をさます”を独立して考察すると、ナンセンスな読みで、(23)の解釈と異なる)。例えば、(22)を、 $(Mx)(Q(P(x)))$ にとると、騒音が小さければ小さいほど、人の眼をさましやすという推論を導く。しかし、これは、通常の信念と矛盾する。したがって、(22)に可能な2通りの解釈のうち、ナンセンスじみた解釈は、抑圧され、(22)には、解釈がひとつしかないという印象を与えることになる。一方、先の(19)においては、Johnについての言語外的信念は、無きに等しいから(例えば、名前から、男であろうといったことは見当がつくくらいのことである)、彼の来る可能性が高いと考えても、また逆に、低いと考えても、矛盾が起きず、(19)の2通りの解釈が自然に許容されるのである。

Fillmoreの分析の第3の問題点は、彼のあげる *even* の非実現の期待が、根本的に不適切な定式化であり、段階の前提こそが *even* の過剰な意味の適切な定式化であることを示す。以下の論証は、Anscombe (1971) に多くを負っている。 $Q=One \text{ would expect that} \dots$ であるような、 $Q(P(x \text{ さえ}))$ を考えよう。

(24) One would expect that even John will come.

このとき、 Q はタイプ1の述語であるから、スコープの決定は比較的どうでも良いことである。念のために、両方考えることにすると、 $(Mj)(Q(P(j)))$, $Q((Mj)(P(j)))$ はそれぞれ、(25), (26)の期待を与える。

- (25) One would expect that one would not expect that John will come. [= $Q(\sim Q(P(j)))$]
 (26) One would expect that John will not come. [= $Q(\sim P(j))$]

一方、そのいずれの場合にも、(24)はそこから単に even を取り去った(27)を含意する。

- (27) One would expect that John will come. [= $Q(P(j))$]

(25)と(27)を比べると、(25)のQの補文は、(27)の否定であることに気付く。Qの性質を考えると、ある文が、 $F \wedge Q(\sim F)$ を含意するというのは、いくら何でも奇妙である。また、(26)と(27)は、 $Q(F) \wedge Q(\sim F)$ と書くことができ、Qの性質を考えると、この式は、 $Q(F \wedge \sim F)$ となる。これは、さらに奇妙である。すなわち、Fillmoreの分析によるなら、evenを含む文を使用することで、ある命題を断定し、それと矛盾する命題を前提する可能性があることになってしまう。この結果は、evenの過剰の意味を、Fillmoreのように、One would expect that...not...のようにパラフレーズすべきでないことを明白に示している。

この欠点を修正するには、先に述べた段階の前提を用いれば良い。そのときには、(24)は、概略、

- (28) $\text{Prob}(Q(P_j)) < \text{Prob}(Q(P_i))$ (ただし、 $i \neq j$. Johnが来ると期待される可能性は、John以外の人に来ると期待される可能性より低い)
 (29) $\text{Prob}(P(j)) < \text{Prob}(P(i))$ (Johnが来る可能性は、John以外の人に来る可能性より低い)

のような段階の前提を持つことになる。

(28)、(29)は、必ずしも、(25)、(26)を含意しない。しかしながら、Johnが来る可能性が低くなるにしたがい、(28)、(29)は、徐々に、(25)、(26)に近付き、その極端な場合に、両者は一致する。すなわち、Fillmoreの非実現の期待は、段階の前提が極端になった場合の特殊ケースに過ぎない。ところが、Johnが来る可能性が極端に低いときには、(24)を矛盾なしに発話することができなくなる。したがって、Fillmoreの分析は、もともと、 $\dot{\text{え}}$ の用法の一部分しか説明できないのである。

以上の議論から、次のことが明らかになった。

- (i) $\dot{\text{え}}$ の焦点を考慮する必要がある。
 (ii) (少なくとも、主文がタイプ2に属する述語を持つときには) $\dot{\text{え}}$ のスコープを考

慮する必要がある。

- (iii) 非実現の期待は、段階の前提にとって代わられなければならない。

〈前提による分析〉

先に、60年代後半から、前提の概念が言語学でも頻繁に論議されるようになると、さえの導入する過剰な意味は、この概念のもとに論じられることが多くなったと述べた。前提の概念も、最初は、意味論的前提 (semantic presupposition) または、論理的前提 (logical presupposition) として定義されることが多かった。ところが、前提の現象の研究が進むにつれて、意味論的前提には、さまざまな問題点のあることが明らかになり、現在では、前提といえば、語用論的前提 (pragmatic presupposition) を考える方が普通になっている。意味論的前提は、以下のように定義される。

ある文Sは、ある文Pを、次の(i), (ii)を満たすとき、かつ、そのときに限り、意味論的に前提する。

- (i) SはPを含意する。
 (ii) \sim SはPを含意する。

さえを持つ文の否定を考えるときには、スコープに注意しなければならない (注2参照)。次の2つの文を考えてみよう。

- (30) 東はどんな小さな音でさえ眼をさます。
 (31) 東はどんな小さな音でさえ眼をさまさない。

ナンセンスな読みを持つ(31)は、(30)の否定ではない。なぜなら、(31)では、さえで修飾される要素の方が、ないより上位の操作子で、(31)は、(32)ではなく、(33)の構造を持つ (xは“どんな小さな音”を指す)。

- (32) \sim (M x) (東はxで眼をさます)
 (33) (M x) \sim (東はxで眼をさます)

(32)に対応するのは、次の(34)である。

- (34) 東がどんな小さな音でさえ眼をさますというのは真でない。

(30)と(34)を比べてみると、これらの文は、ともに、(35)の前提を持つことがわかる。

(35) 東が非常に小さな音で眼をさます可能性は、東がそれ以外の音 (i. e. 大きな音) で眼をさます可能性より低い。

したがって、さゝえの前提は、上述の意味論的定義を満足すると言える。

一方、語用論的前提は、以下のように定義される。

話者 a は、ある文 S の発話において、次の(i), (ii)が満たされるとき、ある文 P を語用論的に前提する。

- (i) a は、P の真を当然のことと見なしている。
- (ii) a は、聴者 b が P の真を当然のこととみたと考えている。

この定義をもっと厳密にするために、話者と聴者の、相手の信念に対する相互的認識を、Grice (1975) 流に組み込んで、

- (iii) b は(i)を知っている。
- (iv) b は(ii)を知っている。
- (v) a は(iii)を知っている。

.....

のように続けることもできるが、おおよその定義としては、上の(i), (ii)で十分であろう。上の定義が、見事に失敗する例として、次のものをあげておこう (Fraser (1971) からの引用)。

(36) Bill dreamt that he had caught a mermaid and that even her tail was green.

この例では、evenに関する前提は、話者にも、聴者にも関係なく、Bill の夢の世界に限定されている。すなわち、話者は、引用文のように、自分では信じてもない他人の前提を借用できるのである (このような例の取り扱い、Fauconnier (1984, 1985) 参照)。

前提の概念に対する一瞥の後、再びさゝえの問題に戻ろう。Fraser (1969) は、(37)が(38)に見られる3つの部分に分析できるとした。

(37) Even Harry got lost.

- (38) a. Harry got lost.
 b. Other people got lost.
 c. One does not expect that Harry would get lost.
 One expects that Harry wouldn't get lost.

Fraserのこの分析は、先の黒田と Fillmoreの分析を統合したものといえる。Fraserは、(38 b), (38 c)に対し、added informationという表現を使用しており、前提という言葉の方はしていない。ただし、(14 c)の説明に、“話者の側の態度”(attitude on the part of the speaker)という、語用論的前提に近い考え方をしている。また、彼は、Fraser(1971)においては、(14 b), (14 c)は、前提ではなく、ある種の含意(implication)と考えるべきであると述べている(ただし、彼の考えている前提とは、意味論的前提のことである)。

これに対し、Horn(1969)は、(38 b)の存在の前提のみを取り上げ、これを前提として位置付けた。また、Lakoff(1972)は、Fraser同様、(38 b), (38 c)の両方を取り上げ、Fraserとは逆に、この両方とも前提と考えた。この当時までには、既に、前提がある場合には破棄されるということが広く知られるようになっていた。そこで、Lakoffは、(38 b)は破棄できない前提であるが、(38 c)は破棄できるとした。これは、先の(24)(=One would expect that even John will come.)についての議論で、既に明らかにしている。また、存在の前提が破棄できないとするLakoffの考えが誤っていることは、後に示す。Kempson(1975)にも、evenについての議論が見られる。そこでは、(38 b), (38 c)を意味論的前提と考えるのをやめ、語用論的なものとするべきであるという方向付けが試みられている。

いろいろと問題の多い、非実現の期待から、段階の前提への移行は、Fauconnier(1975a, b, 1976)から始まる。Fauconnierは、(39)は、Horn(1969)の分析では、(40)ようになるが、実際には、それ以上のことを言っていると主張する。すなわち、(41)のような語用論的確率の段階があることを含意する。

- (39) Even Alceste came to the party.
 (40) 断定: Alceste came to the party.
 前提: Everybody else came to the party.
 (41) Alceste was the least likely person to come to the party.

さらに、(40)で前提とされている命題は、単に、(41)の段階の前提と(40)の断定からの語用論的推論であるとみなされている。

Karttunen & Peters (1979) は、それまでの成果を踏まえ、even の焦点、スコープを考慮に入れるとともに、前提(彼らの用語では、慣習的含意 conventional implicature)としては、存在の前提と、段階の前提の両方を考えている。彼らは、与えられた文からの前提の求め方を次のように定式化している。even の焦点を a, スコープを "... a ..." とする。a を x によって置換した文を "... x ..." とする。このとき、存在の前提、段階の前提は、(42), (43)の方式により算出できる。

(42) There are other x under consideration besides a such that...x...

(43) For all x under consideration besides a, the likelihood that...x...is greater than the likelihood that...a...

そこで、次の(44)の even の焦点を Mary, スコープを Bill likes x とすると、存在の前提は (45 a), 段階の前提は (45 b)となる。

(44) Bill likes even Mary.

(45) a. There are other x under consideration besides Mary such that Bill likes x.
b. For all x under consideration besides Mary, the likelihood that Bill likes x is greater than the likelihood that Bill likes Mary.

Karttunen & Peters のように、前提破棄の操作が組み込まれていない枠組においては、段階の前提に、全称限量子を用いるのは適当でない。例えば、

(46) Bill does not like Sue, but he likes Jane, and even Mary.

のような文を考えると、"Bill likes Sue" の可能性は、ゼロか、少なくとも、"Bill likes Mary" より低い。とすれば、(45 b)は成立しないことになる。

また、彼らは、話者は矛盾に陥ることなく(47)を発話できず、Lakoff (1972) 同様、存在の前提を破棄できないとしている。

(47) Even Bill likes Mary but no one else does.

これも、不正確な観察である。最後に、彼らのやり方では、前提が算出できない場合のあることを指摘しておこう。これは、次章で論じる³⁾。

§3. さへの前提の検討

〈存在の前提について〉

さてここで、この論文の出発点である§1の(1)に戻り、存在の前提(2)について考えてみよう。

- (1) 山田さえその試験に合格した。
- (2) 他の人達も、その試験に合格した。

(1)は、ある種のコンテキストを仮定することで容易に破棄できる。例えば、問題の試験が、追試験であり、他の人達は既に全員合格してしまい、山田が唯一人の受験者だったとしよう。このときには、当然、(1)は(2)の前提を持たない。もっとも、このコンテキストにおいては、(1)よりも、次の(3)の方が適切かも知れない。

- (3) 山田さえその試験には合格した。

(3)では、[・]はが導入するコントラストのため、“試験に[・]”が限定表現として解釈される。したがって、この文は、“山田は他の試験には合格しなかった”という言外の意味を持つ。この種の例から考えるに、日本語では、限定表現の解釈を強制するはは、もや[・]さ[・]えの逆のこゝろを行ふ。さらに、[・]だけを考へあわせると、〈は[・]↔も[・]〉、〈[・]だけ↔さ[・]え[・]〉のような対を成すと思はれる。

〈段階の前提について〉

次に、(1)の段階の前提(4)について考へよう。

- (4) 山田がその試験に受かる可能性は、他の人達がその試験に受かる可能性より低かつた。

さて、先の仮定によれば、他の人達はその試験を受けないのだから、彼らがその試験に合格する可能性は、ゼロである。ゼロより低い可能性はありえない。したがって、(4)は文字通り解釈すると奇妙なものに映る。

ところが、この議論にもかかわらず、(1)は(4)のような前提を持っている。したがって、(4)における他の人達の合格可能性は、現実世界での合格可能性と考へるべきでなく、彼らも受験するという反事實的仮定のもとでの合格可能性を考へなければならぬ。すなわち、

(4)は、コンテキストに応じ、多少の修正を受けることもあるが、依然、(1)の前提とみなして良い。

それでは、この特殊なコンテキストのせいで破棄された存在の前提(2)も、反事実的仮定のもとでの存在の前提であると考えべきなのであろうか。これに対しては、明快な解答をすることは難かしい。しかしながら、恐らく、その必要はないであろうとする事実が存在する。

〈再び存在の前提について〉

ある2つの事態について考えると、両立可能なものと、そうでないものがある。両立可能なものの例は(5)で、両立不可能なものの例は(6)である。

(5) 田口は、ピフテキを食べ、キアビアを食べた。

(6) 木村の家は侵入者に占領されているか、または破壊されているかである。

両立可能な事態が念頭にあるときには、(7)のように、*さえ*によって修飾される文は、存在の前提を持つ(ことができる)。

(7) 田口は、ピフテキを食べ、かつ、キアビア*さえ*食べた。

一般に、*さえ*について論じられるときには、両立可能な事態が考えられていた。したがって、*さえ*の存在の前提が、時に破棄されても、それは、何か特殊事情のせいであるという言い逃れができた。

ところが、両立不可能な事態も、何らかの信念に基づき、実現可能性の尺度に応じて、順序を与えることができる。そのときには、存在の前提は、*組織的に*、破棄される。Anscombe & Ducrot (1978) による次の(8)は、そのような例である。

(8) Il avait peur de retrouver sa maison occupée par l'envahisseur, ou même détruite.(彼は、自分の家が侵入者に占領されているか、破壊*さえ*されているのを見ることになるのではないかと思った)

実際、*さえ*に修飾される、家の破壊という事態が実現するなら、占領するにも占領すべき家がなくなってしまう。したがって、家の破壊は、家の占領を含意するものではない。

両立不可能な事態に対しても段階付けができることが理解されるなら、(8)のような例はいくらでも作ることができる。

- (9) 道山は、最近へまばかりやっているから、減給されるかも知れない。ひょっとすると首にさえなるかも知れない。
- (10) 道山は、佐渡営業所に飛ばされるかも知れない。もしかすると、ダカールにさえ飛ばされかねない。

(9), (10)の例でも、 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ に修飾される文は先行する文を含意しない。それにもかかわらず、段階の前提はある。とすれば、結論は明らかである。 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ の前提としては、段階の前提のみを考えるべきであり、存在の前提は必要でないどころか、あると奇妙なことになる。すなわち、 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ の使用が存在の前提を含むなら、上の(8), (9), (10)は発話できないことになる。ところが、事実として、これらの文は使用可能である。したがって、 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ の存在の前提というのは、両立可能な事態に対する段階の前提が考慮に入れられたときの派生物であり、 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ の基本的意味特性とは無関係であると結論できる。

§2において、黒田が、(11)と、(12)のシエマの交換可能性について考えたことを論じた。しかし、ここの議論から明らかなように、(11)は、(13)のようにパラフレイズしなければならないこともある(ここでの or は、両立不可能性を表す排他的 or である)。

- (11) …even a_n …
 (12) …(a_0, a_1, \dots , and even a_n)…
 (13) …(a_0, a_1, \dots , or even a_n)…

〈段階の前提の算出について〉

§2において、Karttunen & Peters による段階の前提の算出方法を見た。ここでは、彼らの方法が、必ずしも、正しい答を出すわけではないことを示し、その修正案を提出する。

次の例を見よう。

- (14) その場所には、他に食べるものがなかったので、近藤はねずみさえ食べた。

(14)は、勿論、存在の前提(=近藤はねずみ以外のものも食べた)を持たない。 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ に比べると、 $\dot{\text{も}}$ の存在の前提は手強く、(15)は依然、存在の前提をもつ。

- (15) その場所には、他に何も食べるものがなかったので、近藤はねずみも食べた。

実際、もの機能は、まさに存在の前提を導入することだから、そうやすやすとこの前提が破棄されるようでは困る。一方、さえの存在の前提は、恐らく、段階の前提の副産物ではないから、もの存在の前提よりは、簡単に破棄できて当然である。面白いのは、“近藤はねるみさえも食べた”とすると、もの存在の前提が破棄できる。さえもというのは、単に、さえの一変種と見なすこともできよう。

(14)に関して、さえのスコープを決定するのは簡単ではない。問題は、理由節をさえのスコープに入れるかどうかである。(14)から(16)を作ってみても、解釈は変わらない。

(16) ねずみさえ、近藤は、その場所には、他に何も食べるものがなかったので、食べた。

したがって、(14)では理由節は、さえのスコープ内にあると結論したくなる。ところが、さえと理由節の関連についてももう少し詳しく観察すると、このように結論すべきでないとする事実のあることがわかる。

次の2つの例文を比較してみよう。

(17) 花子さえ、太郎が金持だから彼を愛しているのだ。

(18) 太郎が金持だから、花子さえ彼を愛しているのだ。

この2つの文の差は一目瞭然というわけにはいかないが、少し工夫すれば別様に解釈できる。(17)は、花子は、他の女達より太郎を愛する可能性が高いが、その花子さえ、やはり太郎が金持だから彼を愛している、という解釈を持つ。この解釈では、理由節は、さえのスコープ内にある。このときには、理由節の表す命題は、十分条件を構成する条件の1つではあるが、特に必要条件としての意味合いが強く感じられる。すなわち、花子は太郎が金持であるという理由以外にも、彼を愛する理由を持っている（例えば、太郎がハゲであるとして、他の女達は、ハゲは嫌いだが、太郎が金持であるため、彼を愛しているとする。一方、花子は、むしろハゲの男の方が好きであるとする）が、それにもかかわらず、太郎が金持でなければ、花子もやはり太郎を愛することはない、ということである。また、このとき、理由節から生じる言外の意味は、もし、太郎が金持でなければ、花子を含め、彼を愛する女はいなくなる、ということである。これに対して、(18)では、花子は太郎を愛する可能性が他の女達より低い、という、丁度、(17)と逆の解釈ができる。このときの言外の意味は、もし太郎が金持でなければ、花子は当然彼を愛することはないであろうが、他の女達は依然太郎を愛し続ける可能性がある、ということである。この解釈のもとでは、理由節は、さえのスコープ内にはない。また、(17)、(18)を、「…というのは本当でない」という具合に否定してみれば、(17)の否定は、花子は確かに太郎を愛しているが、その理由は、太

郎が金持であるからではない、という読みができ、一方、(18)の否定は、花子は太郎を愛していないという読みができる。

ここで(14)に戻ると、(14)は、明らかに、(18)に近い。言外の意味にのみ注目すると、(14)は、他に食べるものがあれば、ねずみは食わず、他のものを食べるという言外の意味を持つ。そして、ねずみを含め、他のものも一切食べない、という言外の意味は持たない。したがって、(14)における段階の前提は、理由節をもたない“近藤はねずみさえ食べた”の前提と同じあり、(19)のようになる。

(19) 近藤がねずみを食べる可能性は、他のものを食べる可能性より低かった。

しかし、(19)は、(14)の理由節の表現する特殊な状態が成立していない世界、すなわち、他の食べ物があるために、ねずみなど食べる必要性のない世界における前提である。実際、理由節の成立している現実世界では、他に食べるものがないのだから、他のものを食べる可能性は0である。さらに、他に食べるものがない以上、たとえねずみであっても、それを食べる可能性は、結構、高いといえる。したがって、(19)は、反事実的世界における前提である。したがって、(14)の前提からは、(19)のように理由節を取り除かねばならず、理由節を付けたまま、(20)のようにするのは正しくない。

(20) その場所に他に何も食べるものがなかったので、近藤がねずみを食べる可能性は、他のものを食べる可能性より低かった。

(14)では、理由が節で導入されたので、この節は、^さえ^えのスコープ内には入っていないと主張することができた。したがって、前提は反事実的世界へ移されるとはいえ、(14)は、Karttunen & Petersの段階の前提の算出方法に対する決定的反例とはなりにくい。ところが、理由を導入するのに、完全な文を使う必要はない。次の(21)、(22)では、主語の名詞句が理由を導入すると解釈することができる。

(21) 近藤なら、ねずみさえ食べる。

(22) 近藤は、ねずみさえ食べる。

(21)、(22)において、名詞句“近藤”を、理由を導入する表現と解釈させる仮定は以下のようなものである。彼は食物に関して奇妙な嗜好を持ち、ねずみは、彼にとり、このうえもない大好物であるとしよう。この仮定のもとでは、彼がねずみを食べる可能性は非常に高く、(23)の段階の前提は誤まりである。

(23) 近藤がねずみを食べる可能性は、他のものを食べる可能性より低い。

例えば、(22)に対して、Karttunen & Petersの方法を適用してみよう。さゝの焦点は、ねずみである。スコープは、“近藤はxを食べる”である。すると、(23)と概略同じである(24)を得る。

(24) ねずみ以外で考慮に入っているすべてのxについて、近藤がxを食べる可能性は、近藤がねずみを食べる可能性より大きい。

(24)は、勿論、(23)同様、不適切な段階の前提である。

このときに、適切な前提を得るには、やはり、理由を導入する句を取り除き、何らかの“普通性”を回復してやらなければならない。すると、(21)、(22)の段階の前提とは、(25)のごときものとなる。

(25) 普通の人がねずみを食べる可能性は、他のものを食べる可能性より低い。

もうひとつのやり方は、反事実的仮定を導入し、(26)のようにすることである。

(26) 近藤が(食物の嗜好に関して)普通の人であれば、近藤がねずみを食べる可能性は、他のものを食べる可能性より低い。

先に(14)について、さゝを含む文を導くような理由節rが明示的に示されるときには、段階の前提は、 $\sim r$ の世界に移されねばならないのを見た。(14)の場合と、句が理由を導入する(21)、(22)を同じ方法で扱うには、節と句をわけずに、理由表現aから、b ($\neq a$)へと移行するのが最も便利であろう。とすると、(26)は、最終的に次のようになる。

(27) 近藤以外の人がねずみを食べる可能性は、他のものを食べる可能性より低い。

ある異常事態に対して、それ以外というのは、単に、別の異常事態に逢着する可能性も残されている。しかし、ここで意図されているのは、普通の事態のことである。

また、異常な理由を示す句が明言されている(21)、(22)が、存在の前提(28)を持たないことが注目される。

(20) 近藤は、ねずみ以外のものを食べる。

(20)は、現実問題としては、恐らく真であろう。しかし、(20)の真は、(21)、(22)の $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ が導入する前提とは無関係であり、単に、たとえどんなにねずみが好きであっても、そのみ食べているわけにはいかないという事実問題にすぎない。

以上の議論から、 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ を含む文の段階の前提の算出方法は、次のようになる。

(i) $(Mx) P(x)$ において、 P がその事態を導く理由表現を含まないならば、

$$\text{Prob}(P(x)) < \text{Prob}(P(y))$$

ただし、 $x \neq y$ 。

(ii) $(Mx) P(x)$ において、 P がその事態を導く理由表現 α を含むならば、

$$\text{Prob}(P(x)_{(\alpha)}^{\beta}) < \text{Prob}(P(y)_{(\alpha)}^{\beta})$$

ただし、 $x \neq y$, $\alpha \neq \beta$, β は何らかの“普通性”を表す、また、 $P(x)_{(\alpha)}^{\beta}$ は、 P の中の α を β によって置き換えることで得られる表現形式とする。

(i)は、基本的には、Karttunen & Petersと同じである。また、 y を全称限量子で束縛すべきか、存在限量子で束縛すべきかは、故意に漠然とさせてある。全称限量子を用いるのがやや穏当を欠くことは、§2の終りに述べた。といって、存在限量子を用いれば、やや弱過ぎるという気もする。結局、全称限量子を用い、矛盾の生じる恐れのあるときには、その分だけ破棄するというのが、最も理に適ったやり方であろう。

〈前提と世界〉

前節で見た前提の算出方法は、Karttunen & Petersの方法に比べれば精度は増している。しかし、その欠点は、取り扱いが面倒なことである。こうした不自然さが生まれてくる最大の理由は、自動的決定手続きの生み出す前提が、最終的前提でなければならないとする態度であろう。これに対し、自動的決定手続きが与えるのは、せいぜいのところ、第1次の近似と考えるなら、前節で論じられたような問題は起こってこない。

われわれがある文を使うときには、その文は、背後にある一般的知識と関連づけられて解釈される。一般的知識は、法則や、法則に近いような一般性を持つ傾向によって構成される通常の世界を作り、ある特殊な命題が関係する世界は、そうした通常の世界と何らかの関係により結ばれていると考えることができる。このとき、通常の世界の方に、 $\dot{\text{さ}}\dot{\text{え}}$ の使用を可能にする段階の前提があれば、厳密に考えれば偽の前提を与えかねない場合でも、通常世界の前提を拡大して使用できる。例えば、先の(22) (=近藤はねずみさえ食べる)に

ついては、第1次的に得られる段階の前提が偽であっても、これを通常世界の前提の拡大使用と考えることにより、説明がつく。

勿論、通常世界というのは便宜的言い方にすぎない。次の例を見てみよう。

(29) アラブ人にとっては、日本人は豚さへ食べるあさましい民族である。

(30) 日本人が豚を食べる可能性は、他のものを食べる可能性より低い。

(29)の段階の前提(30)は、アラブ人の食習慣によるものであるが、この命題自体がたとえアラブ人にとってさへ偽であってもいっこうに構わないのである。すなわち、アラブ人が、日本人が豚を食べる可能性は、例えば、羊を食べる可能性より高いと思っても良いのである。さらに、(29)の話者も、(30)は厳密に解釈すれば偽であることを知っていても良いのである。また、(29)の話者が日本人であると考え、彼は彼で1つの通常世界を持ち、これはアラブ人の通常世界とは異なる。しかし、(29)が関連を持つのは、話者自身の通常世界ではなく、アラブ人の食習慣が受け入れられている通常世界である。すなわち、話者は、他人の通常世界を一時的に借用できる。したがって、ある文が関連づけられる通常世界は、必ずしも話者自身の通常世界とは限らず、単に相対的なものにすぎない。

このような考え方を採用すれば、Karttunen & Petersの方法が、厳密には偽である(30)のような前提を与えるとしても、もはや大きな欠点ではなくなる。実際、自動的決定手続きにより、最初から、最終的結果が得られるとは期待できない。これはまさに、前提そのものの特性による。すなわち、ある世界で成立している前提を、それが偽となる別の世界にまで拡大して使用することができ、かつ、後者の世界についての文から前提を算出しなければならないからである。こうした事情がある以上、結局、改ためねばならないのは、自動的決定手続きであるよりは、むしろ、それが生み出す前提に対する考え方の方であろう。

この節では、自動的決定手続きの与える結果を、最終的とすべきでないことを論じたが、次章は、さらに、原理的に完璧な自動的決定手続きは存在しえないことを明らかにする。

§4. さへの疑似用法

〈疑似用法〉

まず、疑似用法の定義から始めよう。

疑似用法の定義

言語形式 a を持つ文 P が、 a の論理的制約 α を疑似的に満足するとは、

- (i) P そのものは α を満たさず、かつ、

- (ii) Pから語用論的推論により導出されるQが、 α を満たす、ことである。このとき、Pを α の疑似用法と名付ける。

疑似用法の簡単な例として、yes or no 疑問文に対する疑似返答を考えてみよう。"P?" という疑問文は、Pまたは $\sim P$ 、すなわち、yesかnoで答えるよう要求する。ところが、この制約が常に満たされるとは限らない。

- (1) 明日来られますか？

— 明日は、学校があります。

(1)の返答は、上に述べた制約を満たしていないにもかかわらず、何ら奇妙な感じがしない。その理由は、話者、聴者に共有されている一般的知識を用いる推論により、ごく簡単に、この返答が、"明日は来られない"という命題を示すように解釈できるからである。したがって、この返答は、疑似的に yes or no 疑問文の返答に対する制約を満たしている。これに対し、次の例では、このような推論が極度に困難なため、一般的には、まともな返答とはみなされない。

- (2) 明日来られますか？

— ?? 日本の首都は東京です。

この種の用法が、とりわけ目立つのは、疑似条件文(3)と、 $\dot{\text{し}}\dot{\text{か}}\dot{\text{し}}$ の疑似用法(4)である。

- (3) 喉が渇いているなら、冷蔵庫にビールがある。

- (4) 太郎は川で溺れかけた。しかし、次郎がたまたま近くを通りかかった。

条件文は、おおよそのところ、話者、聴者の共有する暗黙の前提のもとでは、前件が後件を含意するという意味を持つ。ところが、疑似条件文(3)の後件は、前件とは無関係に既に成立している命題である。したがって、前件は確かに後件を含意するが、この含意は、畢竟、無内容な含意にすぎない。ところが、後件を、"ビールを飲んだらどうですか"という暗黙の結論に対する指令と考えるなら、(3)は、通常の条件文に引き戻すことができる。すなわち、疑似条件文 "PならばQ" ($=P$) では、語用論的推論 $Q \rightarrow r$ が存在し、"Pならばr" ($=Q$) は、条件文の制約を満たす。一方、 $\dot{\text{し}}\dot{\text{か}}\dot{\text{し}}$ は、結合する命題の両立困難なことを表す。ところが、(4)で結合されている命題にはそうした関連は見られない。したがって、(4)を $\dot{\text{し}}\dot{\text{か}}\dot{\text{し}}$ の制約を満たすように解釈するには、"次郎がたまたま近くを通りかかった"

→ “太郎は、次郎のおかげで死なずに済んだ” のような推論を考慮することで、疑似的にしかしの制約を満たすと考えねばならない（詳細については、Sakahara (1982, 1983), 坂原 (1985) 参照）。

〈基準条件と譲歩文〉

譲歩文は、普通、“PであってもQ”であるが、ここでは、 \dot{s} えが問題となっているので、“Pであって \dot{s} えQ”について論じる。 \dot{s} えの用法を観察すると、“…b…、かつ、…a \dot{s} え…” (= $P(b) \wedge (Ma)P(a)$) のようになっていることが多い。P(b)とP(a)が両立不可能であれば、 \dot{s} えの代わりに、 \dot{m} あはが用いられる。このとき、P(a)の実現可能性は、P(b)の実現可能性より低いと考えられている。このように、P(b)が明示されるとき、bを基準条件、P(b)を基準命題と呼ぼう。多くの場合、 $P(a) \supset P(b)$ の含意関係が成立し、P(b)は、いわゆる存在の前提とみなされる。

読書のコンテキストを考え、P = “…ならば、本が読み終わらない” とおくと、問題となる本のページ数が不明の場合でも、たくさん読んだ方が読み終わる可能性が高くなり、逆に、Pの実現可能性は低くなるくらいの見当はつく。したがって、Pによって次のような尺度を得る。

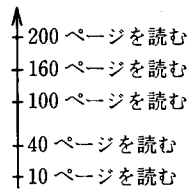


図4. Pによる読書量の段階付け

次に、このコンテキストを精密化する仮定を導入する。三郎は、1000 ページの本を10日間で読もうという計画を立てたが、最初の5日間で200ページしか読まなかった。したがって、1日平均40ページ読んだことになる。このとき、残りの5日間で1日平均xページ読むと、どんな結果になるか考えた。すると、次のような条件文と譲歩文を得た。

- (5) a. 1日平均10ページ読めば、この本は読み終わらない。
- b. 1日平均40ページ読めば、この本は読み終わらない。
- c. 1日平均100ページ読んで \dot{s} え、この本は読み終わらない。
- d. 1日平均160ページ読めば、この本は読み終わる。
- e. 1日平均200ページ読めば、この本は読み終わる。

このコンテキストでは、(5 b)が基準命題であり、1日平均40ページを読むことが基準条

件となる。先の図4において、(5c)は(5b)より上にある。一方、160ページ読むことや、200ページ読むことは、図4では、40ページ読むという条件の上にあるが、このコンテキストでは、本が読み終わってしまうので、もはやPが成立しなくなっている。したがって、図4は、このコンテキストでは次のようになる。

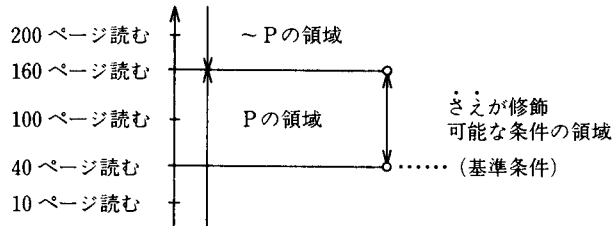


図5. さえが修飾可能な条件

Pの実現可能性は、この図で、上にいけばいくほど低くなっているが、160ページ読むという条件より上では、もはやPが成立しなくなる。これは、以前に見た、(6)を思い起こさせる。

(6) Bill does not like Sue, but he likes Jane, and even Mary.

Sue, Jane, Maryの中では、BillがSueを愛する可能性が一番低いが、用いられている述語が、likeではなく、does not likeであるから、evenをつけることができず、その代わりに、Billが愛す可能性が、Sueより高いが、Janeよりは低いMaryに対してevenが使われている。これより、段階の前提に対して、全称限量子を使うことがやや適切さを欠くことを論じた。さえは、基準命題より実現可能性が低ければ良いのである。

また、残りの5日間で読むべきページが800ページあるという、このコンテキストでは、(5)の代わりに、(7)を用いることができる。

- (7) a. 1日平均10ページ読めば、5日間で50ページにしかない。
 b. 1日平均40ページ読めば、5日間で200ページにしかない。
 c. 1日平均100ページ読んでさえ、5日間で500ページにしかない。
 d. 1日平均160ページ読めば、5日間で800ページになる。
 e. 1日平均200ページ読めば、5日間で1000ページになる。

これらの文の命題間の関連は、取るに足らない計算に過ぎない。さえに修飾される(7c)と(7b)を比べた場合に、 $100 \times 5 = 500$ が成立する可能性は、 $40 \times 5 = 200$ が成立する可能性が低い、などということを主張しているわけではない。これは、後件の含むページ数

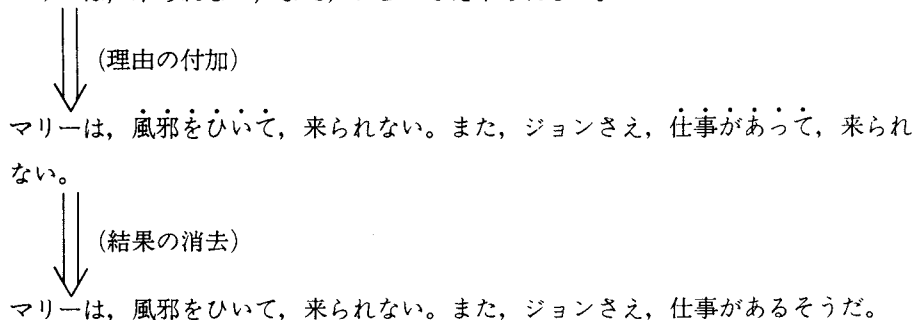
が800ページを越えることで、その本が読み終わるかどうかの問題にされている。したがって、後件は、本が読み終わるかどうかという結論に対する単なる中間ステップにすぎず、**さえ**による修飾可能性は、(5)と同じである。

ところが、想定されたコンテキストがなければ、(7c)から、

- (8) 1日平均100ページ読んで、5日間で500ページになる可能性は、1日平均40ページ読んで、200ページになる可能性より低い。

という馬鹿馬鹿しい段階の前提を出しかねない。この種の例は、恐らくもっと単純な文にもあるだろう。例えば、次の(9)を見てみよう。

- (9) マリーは、来られない、また、ジョン**さえ**来られない。



(9)の3番目の文の段階の前提は、(10)ではなく、(11)と考えるべきである。

- (10) ジョンに仕事がある可能性は、他の人達（特に、マリー）に仕事がある可能性より低い。
- (11) ジョンが来られない可能性は、他の人達（特に、マリー）が来られない可能性より低い。

すなわち、(9)において、“ジョンに仕事がある”という命題は、“ジョンは来られない”という命題を推論させるための前提でしかない。したがって、(9)は、**さえ**の疑似用法なのである。こうした用法が可能であるために、ある与えられた文から、段階の前提を算出するのは、さらに困難となる。発話コンテキストから切り離された場合、**さえ**の段階の前提を自動的に算出する方法は存在しない。

先の(7c)は、**さえ**の疑似用法を含みながら、それ自体は通常の譲歩文であった。最後

に、*さえ*に関しても疑似用法であり、それ自体、疑似譲歩文であるような例をあげる。コンテキストは、従前通りである。

(10) 1日平均100ページ読んで*さえ*、読むべきページが800ページ残っている。

(10)の段階の前提は、(5c)、(7c)と同じく(11)である。

(11) 1日平均100ページ読んで、その本が読み終わらない可能性は、1日平均100ページ以外(特に、40ページ)読んで、その本が読み終わらない可能性より低い。

(10)が2つの疑似用法を含むことを理解せず、(10)から盲目的に段階の前提を求めると、(12)となる。

(12) 1日平均100ページ読んで、読むべきページが800ページ残っている可能性は、1日平均100ページ以外(特に、36ページ)読んで、読むべきページが800ページ残っている可能性より低い。

もちろん、(12)は論外である。

§5. 結 論

この論文では、まず*さえ*の導入する段階の前提と存在の前提を見た後に、限定表現との関連において、否定文に現われる*さえ*は、限定表現の段階的言外の意味を、肯定文から否定文へと一定に保たせるようにするのを見た。ついで、*さえ*についてこれまでに提案された分析を批判的に検討し、補文の含意関係を保持するか逆転するかにより、タイプ1、タイプ2の述語を設定し、タイプ1の述語については、*さえ*のスコープの決定は、不可能なうえに、あまり意味はないが、タイプ2の述語の補文に*さえ*が現われる場合には、スコープを考慮に入れる必要があることを論じた。また、Fillmoreの非実現の期待は適切でなく、Fauconnierの提唱するように、段階の前提を用いるべきであることも明らかにした。

次に、存在の前提は、両立可能な事態の尺度が考慮されているときにのみ成立する前提にすぎず、両立不可能な事態の尺度については当てはまらず、*さえ*の基本的意味特性から外すべきことを論じた。また、Karttunen & Petersによる段階の前提の算出方法の弱点を指摘し、その修正案を提出した。最後に、*さえ*の疑似用法を論じ、結局、前提の自動的算出方法はありえないことを示した。

注1. ここでは、日本語の“さえ” スランス語の *même*、英語の *even* が、共通する意味特性を持っていると言っているだけであり、全く同一であるとは主張されていない。例えば、統語上の問題としては、“さえ”は助詞であるから、直接的に修飾できるのは名詞(または、で、に、からなどの付いた名詞、形容詞の連用形)だけである。ところが、*même* や *even* は副詞であるから、動詞も修飾できる。

- a. Mary even respects John.
 b. メアリーは、ジョンを尊敬さえしている。

上の例では、*even* と“さえ”の直接的修飾要素は、下線部である。

また、“さえ”は条件文の前件において、使われた条件が十分条件の中でも弱いものであり、もっと強い十分条件が存在することを強調する次の用法を持っている。

- c. 太郎さえ来れば、パーティを始められる。

ところが、これに対応する下の d は、このような解釈を持たない。

- d. If even Peter comes, we can begin the party.

このときは、*even* でなく、*only* を使わねばならない。条件文は後に説明するタイプ2の述語の性質を持っており、前件が設定する含意の順序関係を逆転する。例えば、e の順序関係があるときは、f の順序関係が成立する。

- e. $P \supset Q$
 f. $(Q \supset R) \supset (P \supset R)$

したがって、c の解釈は、単に“さえ”のスコープが全文に広がっただけのことであり、基本的には、g と h (の解釈のひとつ) の差にすぎない(“一とは思えない”はタイプ2の述語である)。

- g. 太郎さえ来る。
 h. 太郎さえ来るとは思えない。

ところが、前件に現われる *even* などは、条件文全体にわたるようなスコープを取ることができず、結局、if 節に埋め込まれる以前と同じ解釈を持つ。

前件に現われる“さえ”が条件文全体にわたるスコープを持つことができるのに対し、*even* や *même* などにはそれができないという事実を、直接的にこれらの語の差とするか、それとも、日本語と、英語やフランス語の条件文の構造上の差とするかは、興味深い問題である。ただ、if 節が移動変形に対する「島」であることを考えると、これは、多分、条件文の構造の差ととらえるべきであろう。

注2. ある種の意味特性が前提であるかどうかの最も簡便なテストは、元の文を否定したときにも、その意味特性が残るかどうかである。このとき注意しなければならないのは、否定のスコープが“さえ”のスコープより広くなるような表現方法を選ばねばならないということである。したがって、a (= (1)) の否定としては、b でなく、例えは、c を考えるべきである。

- a. 山田さえその試験に合格した。
 b. 山田さえその試験に合格しなかった。
 c. 山田さえその試験に合格したというのは本当でない。

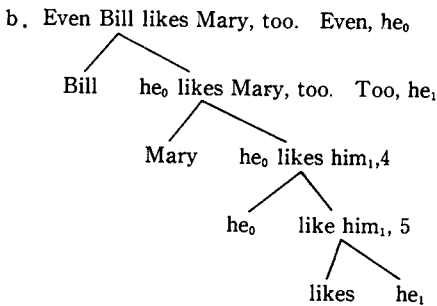
このとき、cは確かに、aと同じ段階の前提と存在の前提を持つのが見てとれる。

注3. K & Pの前提の算出には、いくつかの問題点がある。ささいな点としては、この枠組では、否定は、NPとVPを結合する規則17により導入され、一方、evenはSに対する変項の置き換えとして導入されるため、evenのスコープは必ず否定のスコープより大きくなり、それが逆転する派生はありえない。したがって、

a. John doesn't like even Mary.

の読みの1つ(=JohnはMaryまで愛しているわけではない)の派生を作ることができない。

もっと重大な欠点は、even, too onlyなどが2つ以上表われるときに、不完全な前提しか与えないことであり、これは、彼らの算出方法の根底にある考え方が誤っていることを示す。例えば、次のものについて考えてみよう。



筆者の計算に誤りがなければ、bは真理条件としてcを、前提としてdを持つ。

c. Bill likes Mary.

d. Bill is male.

Mary is female.

Bill is acquainted with Mary.

Bill likes someone else besides Mary.

Someone else besides John likes Mary.

The likelihood that someone else besides Bill likes Mary exceeds the likelihood that Bill likes Mary.

問題は、“Someone else besides Bill likes someone else besides Mary”がどこからも出て来ないことである。

彼らの方法は、白井(1984)に述べられているように、 α , β がそれぞれ、 $\langle \alpha^e, \alpha^i, \alpha^h \rangle$, $\langle \beta^e, \beta^i, \beta^h \rangle$ のように翻訳されるなら、基本的には、

e. $\langle \alpha^e(\hat{\beta}^e), \alpha^i(\hat{\beta}^e) \wedge \alpha^h(\hat{\beta}^i) \rangle$

のような翻訳を持つ。evenやtooなどの場合には、それらの語が導入する前提も考慮しなければならないから、eの第2項はもう少し複雑になり、概略、fのようになる(正確には、fは整式でない)。

f. $\alpha^i(\hat{\beta}^e) \wedge \alpha^h(\hat{\beta}^i) \wedge \text{even}^i(\alpha^e, \hat{\beta}^e)$

α^h は、 β に由来する前提の継承関数だから、これから、even により始めて導入される " α 以外のものが β^i " が出てきたら奇妙なことになる。実際、そうしたことはない。一方、evenⁱ の第 2 項は β の外延表現 (の内包) だから、ここから、 β の前提に由来するものは出て来ない。すると、 β の前提 "……likes someone else besides Mary" と、even α に由来する "someone else besides Bill……" の組み合わせようがなくなり、結局、この前提は、K & P のやり方では消えてしまう。非公式的な言い方では、 α と β の結合において、 α 、 β が $\langle \alpha^e, \alpha^i \rangle$ 、 $\langle \beta^e, \beta^i \rangle$ と翻訳されるなら、 $\alpha^e(\beta^e)$ 、 $\alpha^e(\beta^i)$ 、 $\alpha^i(\beta^e)$ 、 $\alpha^i(\beta^i)$ のすべての組み合わせを考えるべきなのであり、K & P では、この最後のものが考慮されていないため、不完全な結果を出す。彼らが、 $\alpha^i(\beta^i)$ を斥けたのは、"Bill likes Mary" において、Mary の前提を女であること、like の前提を "…は…と知り合いである" としたとき、Bill が知り合いであるのは、Mary 自身であり、彼女の性別ではないという理由からであった。しかし、これはたまたま取り上げた例が不適当であったことを示すにすぎない。

さらにまた、only と even を持つ次のような例も、彼らのやり方で扱うのは難しい。

g. Only Bill likes even Mary.

この例からもさまざまな前提が出てくるが、特に、

h. Others than Bill like others than Mary.

をどのように得るかが問題となろう。面白いのは、b でも g でも、外側の前提導入表現から処理していくと簡単に望み通りの結果が得られることである。例えば、f では

f. Even Bill likes Mary, too.

f'. Bill likes Mary, too.

f". The likelihood that others than Bill like Mary, too, exceeds the likelihood Bill likes Mary, too.

f". Others than Bill like Mary, too.

のように、また g では、

g. Only Bill likes even Mary.

g'. Others than Bill don't like even Mary.

g". Bill likes even Mary.

のように進めて行けば良い。

また、Ducrot (1972) にも、前提算出の試みがなされており、ここでは、seulement (= only) が重複して現われるような例も扱われているため、K & P より、むしろ正確な形式化がなされている。

引用文献

- Anscombre, J. C. (1973) Même le roi de France est sage, *Communication* 20
 Anscombre, J. C. & Ducrot, O. (1978) Echelles argumentatives, échelles implicatives et lois de discours, *Semantikos*, vol. 2
 Ducrot, O. (1972) *Dire et ne pas dire*, Hermann.
 Fauconnier, G. (1975a) Pragmatic Scales and Logical Structure, *Linguistic Inquiry*, vol VI. 3

- Fauconnier, G. (1975b) Polarity and the scale principle, *C. L. S.* 11
- Fauconnier, G. (1976) *Etude de certains aspects logiques grammaticaux de la quantification et de l'anaphore en français et en anglais*, Thèse de doctorat d'état.
- Fauconnier, G. (1984) *Espaces mentaux*, Ed. de minuit (1985, *Mental spaces*, MIT, Bradford)
- Fillmore, G. (1965) *Entailment rules in semantic theory*, Ohio State University, Reproduced in *Readings in Philosophy of Language*, J. Rosenberg and C. Travis (eds.), 1971, Prentice-Hall, Inc.
- Fraser, B. (1969) An analysis of concessive conditionals, *C. L. S.* 5
- Fraser, B. (1971) An analysis of "even" in English, Fillmore & Langendoen (eds.), *Studies in linguistic semantics*, Holt, Rinehart and Winston.
- Horn, L. (1969) A presuppositional analysis of "only" and "even", *C. L. S.* 5.
- Karttunen, L. & Peters, S. (1979) Conventional implicature, Oh and Dinnen (eds.) *Syntax and semantics* 11, Academic Press.
- Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative grammatical studies in the Japanese language*, (1979, Garland)
- Lakoff, G. (1972) Linguistics and natural logic, Davidson and Harman (eds.) *Semantics of natural language*, Reidel.
- Sakahara, S. (1982) *L'interaction de l'inférence avec la présentation de la condition*, thèse de doctorat de 3^e cycle, Université de Paris 8.
- Sakahara, S. (1983) La chaîne de prémisses et la chaîne d'inférences, *Semantikos* vol. 6.
- 坂原 茂 (1985) 日常言語の推論, 東京大学出版会
- 白井賢一郎 (1984) 『前提』と会話の含意の定式化について, 『対話行動の認知科学的研究』所収, 「対話行動の認知科学的研究」研究会, 京都大学.